

The state of the support for the developing country through the sport

1K08B109-0 鈴木祥太郎

指導教員 主査 作野誠一 副査 吉永武史

【研究目的】

世界中では年間約1200万人の子供たちが死に追いやられている。その大部分は、開発途上国に生きる子供であり、原因は餓え、病気、戦闘の犠牲など、先進国である日本に住む人々にとっては体験し得ないことである。では、開発途上国が抱える問題は解決に向かっているのか。この問題に答えることは簡単ではないが、一つ言えることは、まだまだ解決すべき問題は山積みであり、世界中には苦しんでいる人々が大勢いるということだ。

では、先進国の開発援助の現状はどうか。

岡田(2000)は、「近年の開発援助は、ODAの削減、累積債務等の種々の問題を孕み、援助供与国においては援助疲れの様相を呈している。開発途上国の発展の阻害要因として、間伐等の自然災害の頻発、戦争や紛争に伴う国力の減退等の不可避な問題も存在するが、先進国が過去数年間継続してきた開発援助システムが多くの問題を抱えている」(岡田2002.p168)と述べている。

このような状況下で、近年新しい開発方法として、「スポーツを通じた開発」が注目されてきた。スポーツは途上国への開発援助のツールとして、利用されるようになってきた。「スポーツ」は、実施の仕方によっては開発途上国が抱える問題を解決に導く可能性を秘めている。

では、日本における「スポーツを通じた開発」の取り組みの現状はどうか。日本での議論の状況を把握する必要があったと考えた。

わが国、「スポーツを通じた開発」を効率的に進めるべきである。そのために、日本における「スポーツを通じた開発」の研究を概観し、評価する必要がある。

本研究では、わが国における「スポーツを通じた開発」の研究の蓄積をもとに、議論をまとめ、評価し、効率的な開発援助のために、問題点を呈示することを目的とする。

【研究方法】

日本における、「スポーツを通じた開発」に関する先行研究を整理し、分析することにより、日本の開発援助の問題点を浮かび上がらせる。

また、「スポーツを通じた開発」の新たな形を提案している中田英寿氏の取り組みにスポットを当て、検証す

る。

文献による調査を中心に進めていく。

【結論】

日本における先行研究をもとに、スポーツを通じた開発について検証することにより、以下3点の問題が浮き彫りになった。

①先進国の目線でスポーツを論じるだけでは、スポーツを通じた開発の発展はない。途上国の現場から、解決策を論じなくてはならない。

②一時的な開発援助では効果が見られない。長期的に援助するためのシステムづくりが必要である。

③これから、さらに「スポーツを通じた開発」の熱は高まると思われる。

日本での活動を活性化させるとともに、この分野の研究もよりいっそう活性化させる必要がある。

つまり、開発途上国の現状をよく理解し、途上国の目線で、「スポーツを通じた開発」を実施していく必要があるということであるということである。

【今後の課題】

援助大国であり、スポーツ大国でもある日本において「スポーツを通じた開発」が有効に行われていくには、議論の活性化が必要であると考えられる。日本での研究論文が少ないのも事実である。

まず、途上国の現状を知ることが必要である。本文で取り上げているTAKE ACTIONのようにサッカーを通じて、世界の現状を知らせる取り組みは、非常に重要であると考えられる。それが、途上国目線でスポーツを考える第一歩であると考えられる。

途上国目線でスポーツを捉えるということは、「開発分野におけるスポーツ」だけでなく「開発途上国におけるスポーツ」を理解することである。

TAKE ACTIONの取り組みのように、「途上国の現状」、「途上国におけるスポーツ」を真に知るためのイベントや仕組み作りが必要なのではないかと筆者は考える。